

佐野金之助氏追悼

磯 貝 英 夫

佐野金之助氏は、昭和四七年三月一九日に逝去された。まことに痛恨のきわみである。本誌の巻頭にかかげた論文は、その病中に成った遺稿である。

氏は、四六年七月、胃部疾患のため入院、放射線治療を受けて、八月末に退院された。九月には、たいへんよくなった、なおしばらく静養する、という元気な手紙とともに、原稿一編が送られてきて、私もやや愁眉を開いたことであつたが、いまから思えば、それは、一時の小康期であつたらしい。その年の一二月には、病は再び悪化し、翌年三月ついに永眠されたのである。

氏は、昭和二五年に広島文理科大学を卒業ののち、郷里である愛知県の高校園語教師として勤務のかたわら、文学の評論・研究にうちこみ、三〇年と三四年には、『文学界』および『群像』の懸賞評論に当選し、その方面では早くから令名のある人である。私は、二六年ごろ、おなじ郷里の愛知県で氏と知り合い、以後、書信を交換し、また、時折は会う機会も持っていた。四一年に『近代文学試論』の刊行を企てたとき、先輩として氏にも参加を請うたのだが、氏は積極的に賛意を

表し、以後、最も熱心な会員として、漱石関係の論稿を次々に投じられた。

ここにかかげた論文は、氏の一連の漱石論の最後のものであり、最初の入院中に手がけられ、退院後の小康時にまとめあげられたものである。当然、もっと早く公表されるべきであつたが、折わるく、依頼したところの印刷事情が極度に悪化し、本誌の刊行がまる一年もおくれるという悪運にぶつかり、その上、十号記念特集号を先立てたことも重なって、いま、ようやく発表の運びになつたわけである。このことを、だれよりもまず故人の靈にわびたい。私は、いま、日ごろの氏の温顔を思い出し、それにあまえている自分を意識している。

未亡人によると、氏は、その小康時も仕事への意欲が旺盛で、次は鵬外を手がけるつもりで、資料を集めたり、メモをとったりされていたとのことである。そして、何かあせつているかのようになつたことである。しかし、再入院時には、もはや本を読む元気はなかつたという。その心事を想像すると、いまも胸が痛い。

病魔は、氏を志のなかばで奪つたごとくであるが、しかし、氏の本領は、これまでの氏の仕事の上にかなりよくあらわれていると言つてよい。私は、一度ゆっくり、氏の人と仕事の全体を省察してみたい希

望を持っているが、ここでは、その略歴と主要論文目録とをかかげて、追悼のよすがとしたい。

一 略 歴

大正一二年四月二日、愛知県津島市に生まれた。昭和一四年四月、愛知県第一師範学校予科入学。一九年九月、同校本科卒業。翌月入隊し、二〇年六月陸軍見習士官となる。八月、広島で被爆負傷。二二年四月、広島文理科大学国語国文学専攻入学。二五年三月、同学卒業。四月、愛知県松蔭高等学校（名古屋市）教諭となる。以後、同県熱田高校、尾西市立高校、木曾川高校、名古屋西高校、瑞陵高校、千種高校を歴任。四六年六月発病し、七月、愛知県ガンセンターに入院。八月末退院し、一二月再入院。四七年三月一九日永眠。遺族に、芳枝夫人および二男一女がある。

二 論 文

- 島崎藤村の「春」について
 一 自伝的作品の意義
 梶井基次郎論
 一 その幻想を通じて
 現代詩論・密封された祝祭
 現代と文学
 織田作之助論
 井上 靖論

- 『日本文学研究』 昭二四・一〇
 『日本文学研究』 昭二七・一
 『プロメテ』 昭二七・四
 『プロメテ』 昭二七・八
 『日本文学研究』 昭二七・一一
 『作家』
 ?

三島由紀夫論

『作家』

昭二八・三

一 宿命の美学

新聞小説の方法

『文学界』

昭三〇・五

(第一〇回課題評論当選)

このほか、三〇年一月の『文学界』には、第七回課題評論に「現代詩は貧困か」、また、同年六月の『文学界』には、第一一回課題評論に「三島由紀夫論」が、それぞれ、候補作に選ばれたことが発表されている。

活力の造型

『群像』

昭三四・六

一 戦後世代の文学的課題

(新人文学賞、評論の部当選)

非生命的な「われら」の観念

『群像』

昭三四・九

〈書評・大江健三郎「われらの時代」〉

散文芸術への欲求

『群像』

昭三六・三

心情と理念

『国文学攷』

昭三七・五

夏目漱石

『近代文学試論』

昭四二・一一

夏目漱石(二)

『近代文学試論』

昭四三・一二

一 「余裕」の意味するもの

『三四郎』論

『近代文学試論』

昭四四・九

大患と漱石

『国文学攷』

昭四七・四

一 「思ひ出す事など」「彼岸過迄」

『行人』論

『近代文学試論』

昭四八・六

一 「漱石的」なものとは何か